ビジョン：１０年後の本学の将来像

中四国唯一の学部構成≪芸術、生命科学、危機管理≫が、本学のスローガン《芸術と科学の協調》につながる。これからは、デザイナーとエンジニアの間に明確な境がなくなり、専門職能人にもマネージメントやファイナンスの素養が必要になると言われている。本学の学部構成は、本質的に時代の趨勢に合っている。

この構成を元に、本学の存在意義を、芸術、文化と近代産業の街“倉敷”の地（知）の拠点「COC」として位置づけている。ミッションに記されている人材養成をさらに確実なものにするために、３分野≪芸術、生命科学、危機管理≫の協調を進めたい。結果として、倉敷の上質なイメージを冠にいただく大学としてのブランドを確立し、地域から頼りにされる大学となることを目指す。

地域共生を目指す大学としての１０年後のあるべき姿を、以下に集約する。

◎　授業・研究・創作を通じて、豊かな感性、理性、品性を具えた人材を輩出する大学となる。
◎　学生が正課・正課外活動を問わず主体的に活動できるように教職員が支援し、保護者が安心できる大学となる。
◎　教職員の弛まざる自己研鑽を大学として支援し、活気のあるキャンパスライフを全員が楽しむことができ、誇りを持てる大学となる。
◎　ここに集う全ての人々が、自分自身の成長を実感でき、自信を持てる大学となる。
◎　学生、教職員の積極的な研究・創作活動や地域との共同活動等によって、在学生、地域の人々が周囲に入学を薦める大学となる。
◎　”地（知)”の拠点として、新たな人材育成および価値の創造に寄与し、地域の人々が頼りにする大学となる。

ビジョンを支える事業の柱

１０年後のあるべき姿「ビジョン」を見据え、それを支える事業の柱を以下に定める。

１．教育について
学ぶ者と教える者の信頼関係を重視した人間教育である「信頼の教育」を実践するため、教育課程・学生支援・就職支援を充実・推進する。

２．研究・創作について
教育の支えとなる研究・創作活動を、大学として支援する。

３．社会連携について
大学の知的財産を活用し、地域の活性化、教育・研究の発展に寄与する。

４．内部質保証について
大学としての質保証が自らの責任において自律的に進行するように、継続的な検証システムを整備し、運用を徹底する。

５．経営基盤の安定化について
持続的な発展のために、組織、財政において経営基盤安定化に向けた体制を構築する。

倉敷芸術科学大学のビジョン策定にあたって

倉敷芸術科学大学は、岡山、倉敷市等の強い要請にもとづいて、加計学園の「建学の理念」の基に平成 7 年に創設開学した。

本学が位置する倉敷は、全国的にも知られた文化芸術の香り高いところであり、そこに「芸術と科学の協調」という学術スローガンをかかげて 20 年間、教育研究の成果を積み上げてきた。これは「不易流行」（不変の軸と柔軟な対応）でいう「不易」（不変の軸）の部分である。一方、その間、18 歳人口の減少、少子高齢化、経済のグローバル化、技術の進展と価値観の変化等々、大学を取り巻く状況も大きく変化してきている。これらに対して「流行」（柔軟な対応）の部分、すなわち教育人材育成について適切に対応すべく、学部学科等の改編もなされてきた。

いま本学は芸術学部、生命科学部、危機管理学部の 3 学部構成になっているが、これらは、人々の精神的、物理的な安全と安心、ひいては満足と幸せを希求する学術教育分野として個性ある構成となっている。とくに教育・人材育成については、これまで多くの大学で組成されている文理医等の区分ではなく、横断的な教育内容になっている。この教育の成果を上げるために「信頼の教育」（学生と教員の信頼関係を重視）を実践し、“Ambitious and Attractive Kurashiki University”を構築する。

これから 5 年、10 年さらには 20 年に亘ってこの個性ある教育研究において成果を上げるために、いかなるビジョンを持ち、いかなるアクションプランを作成するかが、緊喫の課題である。

ここに、これからのあるべき姿、進むべき道として、ビジョン（将来像）、事業（教育研究）の組成、そしてそれらを達成するためのアクションプランを作成する。

平成２９年７月